

日本占領下華北における華北善隣会と機関誌『建設戦』・『敦隣』

菊地 俊介

はじめに

華北善隣会とは、恐らくその名も殆ど知られていない組織であろう。一九四〇年に日本占領下にあった北京日本大使館の管轄下で日本人と中国人が共同で設立し、「善隣工作」と呼ばれる一種の宣撫工作に携わった組織である。機関誌として、一九四二年八月から日本語雑誌『建設戦』を、一九四四年一月から中国語雑誌『敦隣』を発行した。

華北善隣会の存在や、その活動がメディアに現れるのは一九四三年一月以降の一時期的みであり、成立から『建設戦』発行までの組織のあり方は現時点では歴史上の空白である。一九四三年初頭より始まった日本の対華新政策により、汪兆銘を主席として日本占領下の中国を統治する中華民国国民政府（以下、汪兆銘政権）に対して、日本は租界の返還や不平等条約の改正を進め、中国の「独立自主」を尊重する方針を打ち出した。一九四〇年三月に日本占領下の華北も、汪兆銘政権下に形式的には吸収合併されている。華北のいわゆる傀儡政権である中華民国臨時政府及びそれを継承した華北政務委員会と「表裏一体」の関係を標榜し、日本人と中国人が共同で参画して民衆工作の中心的な役割を担った中華民国新民会（以下、新民会）では、日本人職員が一斉に離職し、日本の対華北占領統治も形式的にせよ「中国人による中国の統治」、即ち中国人の主体性を前面に打ち出すようになった。華北善隣会の設立はそれより前

であるが、華北善隣会の存在がメディアに現れる時期や、華北善隣会が残した資料は、およそこの対華新政策以降のものと言って良い。

華北善隣会が発行した日本語、中国語それぞれの機関誌を比較すると、日本人と中国人が共同で参画した公的機関における、その共存のあり方が見えてくる。日本占領下の公的機関に身を置き、対日協力者、或いは「漢奸」と呼ばれることになる中国人にも、親日化工作に従事した一方で、中国の民族意識を高めようとした側面や、中国と日本の対等な関係を構築しようとした側面はないのか。『敦隣』はこのような問題を今日の歴史研究に投げかける。その意味で本稿は、近年進む傀儡政権史像の再検討と問題意識を共有し、特に嵯峨（二〇一六）、堀井（二〇一七）など、日本占領地区の中国メディアや中国人指導者層に、日本批判の言説や中国の独立維持を追求する姿勢などを見出す研究に連なるものである。

一方、中国におけるいわゆる淪陷区文学研究では、日本占領下華北の文化統制は他の占領地区や植民地に比べて不徹底だったとの指摘が既になされており、杉野（二〇〇〇）、徐迺翔、黄万華（一九九五）、張泉（二〇〇五）、馮昊（二〇一七）などが、同地の中国文学に日本への抵抗の様相も見られることを論じている。こうした中、『敦隣』については張泉（一九九四、二〇〇五）が日本占領下華北の文学について体系的にまとめる中で、同地の雑誌のひとつとして概説している。だがその評価は、『敦隣』は日中両国の善隣や独立自主の尊重を謳うが、それは日中戦争末期

になって行き詰まった日本の足掻きに過ぎず、欺瞞に満ちたものだという否定的なものである。但し文芸欄は充実していたと評価している。^③

華北善隣会及びその機関誌について論じている先行研究は、管見の限り菊地(二〇一四、二〇一九)及び張泉(一九九四、二〇〇五、二〇一七)のみである。日本占領下華北で発行された在留邦人雑誌の、对中国認識に関わる言説分析を行った菊地(二〇一四、二〇一九)が、考察対象の雑誌のひとつである『建設戦』の発行元として、華北善隣会について概要のみ説明している。だが『建設戦』の言説分析も对中国認識に限定している上、華北善隣会の組織構造や活動内容に関する詳細な検討や『敦隣』に関する考察には及んでいない。張泉(一九九四、二〇〇五)は前述の通り『敦隣』について概説しているが、その発行元である華北善隣会のこととは張泉(二〇〇五)が『大東亜共存共栄』と『中日親善』の産物である^④と一言付しているだけで、組織自体に関する考察はなく、また『建設戦』の存在にも言及していない。張泉(二〇一七)は『敦隣』の編者である王真夫について概説しているが、華北善隣会についてはその存在に触れるのみで説明がなく、『建設戦』にも言及していないのは前著と同様である。^⑤

本稿は、まずそもそも殆ど知られていない華北善隣会という組織自体及び『建設戦』という雑誌の全体像を捉え、その上で『敦隣』について再検討する。この三者を視野に入れることで、『敦隣』だけを単独に論じた先行研究とは異なる新たな問題を見出すことができよう。

一 華北善隣会の組織構造と活動内容

華北善隣会とはいかなる組織なのか。確認が可能な限りの資料の記述をつなぎ合わせると、次のようになる。

一九四〇年夏に、北京日本大使館で鍊成課長などの要職を歴任した三原敏男を中心に、日本人と中国人の有志が共同で設立し、興亜院華北連絡部、次いで北京日本大使館の指導下で活動した団体である。一九四三年二月に日本当局に登録され、一九四四年六月には中国財団法人となり、会長に曹汝霖^⑥、理事長に三原敏男が就任した。会員は約五百人に上る。^⑦

加えて、同会概要にある「方針」には、「進んで軍、官の指導を受くるは勿論、特に新民会及華北興亜翼賛会等とは特に緊密に連繋する」とも記されている。新民会は前述の通り、中国側の民衆仕事を担った組織である。それに対して、華北興亜翼賛会は一九四三年七月に発足した組織で、北京日本大使館の下で在華日本人に対する諸仕事を管轄した。会長には公使の塩澤清宣、副会長には北支那開発株式会社総裁の津島壽一、顧問のうちの一人には新民会最高顧問の鈴木美通が加わり、事務局長には三原敏男が就任、委員には大使館、国策会社の要人らが名を連ねている。^⑧華北善隣会は現地の軍部、政界と密接な関係にある公的機関のひとつだったと捉えるのが妥当であろう。

一九四五年一月時点の「財団法人華北善隣会役員名簿」を見ても、会長は華北政務委員会諮詢委員の曹汝霖、理事長は在北京日本大使館情報課長の三原敏男、常務理事には華北政務委員会情報局長の管翼賢と在北京日本大使館情報課嘱託の小平常松、理事には華北政務委員会委員の方若、北京商務会会長で全国経済委員会委員の鄒泉蓀、北京居留民団長の西田畊一、監事には華北食糧公社理事の于伯銓、鹿島組顧問の近藤裕というように、^⑩日中双方の統治機構の要人が名を連ねている。

では、華北善隣会とは何をした組織なのか。『建設戦』第一三号から第一七号に、「華北善隣会の目標」が掲載されている。

本会の目標とするところは、華北に於ける興亜運動の重要な部門を占むる善隣工作に関し、机上の空論に陥らず、思い付計画に墮

せず、真の実情を基礎とする真摯且篤実なる研鑽に立脚し、最も適切な対策を樹立、之を上司に具申し、其の施策に資すると共に、夫々自己の職域に活用し、関係機関の諮問に応じて之を推進する外、汎く善隣思想を普及し、且自ら進んで適切な事業を行う等、全面的に善隣工作の活潑なる顕現浸透を図り、以て日華両国の善隣友好に寄与貢献するに在り。^⑪

これによると、「善隣工作」の立案や提言を主たる業務としていたようである。この「善隣工作」とは一種の宣撫工作と言えるものだが、次章で詳述する。自らも事業を行うとあるが、ここからは具体的な内容が見えてこない。

華北善隣会が主体となり、政策提言以外の具体的な活動を実施したことが記述されている資料は、一九四三年一月になって漸く見られるようになる。同年一月一日から二二日まで、華北では「日華善隣週間」が設けられ、職場や学校で「善隣工作の真髓を理解せしむる」ために講演会、座談会、表彰など様々な活動が実施された。^⑫新民会機関紙『新民報』は、華北善隣会が日華同盟条約の締結を祝い、大使館の指導の下で日華善隣週間を実施するのだと、恰も華北善隣会がその主催者であるかのような報じ方をしているが、^⑬『建設戦』が掲載する北京日本大使館の日華善隣週間実施要項によると、主催者はあくまでも「大使館」となっている。そして「指導機関」が「各公館長及華北興亜翼賛会」であり、「指導要領」に「各指導機関は華北善隣会を利用活躍せしむるものとす」とある。^⑭どのように「利用活躍」させたのかについては、華北興亜翼賛会が活動を総括する中で、華北善隣会にラジオ放送、懇談会、パンフレット配布、紙芝居などの宣伝活動を実施させたことが記されている。^⑮このほか、『新民報』は同期中に華北善隣会が主体として取り組んだ具体的な活動として、無料診療所の設置運営などを報じている。^⑯

これ以降、華北善隣会が様々な社会事業の実施主体として記述されるようになる。華北善隣会が直接指導した社会事業として、西苑愛隣手工業所、育青女子高級職業学校、北京日華語学院などが挙げられ、^⑰その他、中国人学生による劇団を組織し、慈善公演や日本軍、中国人労働者向けの慰問公演にも力を注いだことが紹介される。^⑱

また、華北善隣会には、華北善隣同志会という「傘下団体」があった。以下、『建設戦』の記述を見ていくと、「華北善隣会の実践部門的役割を果すべきものの必要性より」設立したもので、「各方面職域に存在する華北善隣同志会を浚刺果敢に活躍せしめ、最高幹部以下全社一体、適切な善隣工作に邁進して、社の内外に亘り日華の善隣を具現」するのだという。^⑲加えて、「華北興亜錬成所に於て善隣並之に關聯する特種の錬成を受けた日人を以て華北善隣同志会を組織し、本会の有力なる傘下団体として、鞏固なる同志的血盟の下、夫々の職域に於て会運動に挺身せしむる」ともいう。^⑳華北興亜錬成所とは、「新華北建設に挺身する在住皇国民に対する、現地に於ける綜合統一的最高の皇国民錬成所として」一九四三年四月に設立されたもので、^㉑これについて「華北興亜錬成所に於て善隣工作要員として錬成を受けたるもの（華北善隣同志会員）が各会社団体等の善隣施策の中核となり且特に其の実施に努力したるは適當なり」と論じられている。^㉒

これらの記述をつなぎ合わせると、次のようになる。華北善隣会は、華北善隣同志会という日本人組織を傘下に収めていた。そしてこの華北善隣同志会員は会社や団体などで「善隣工作」の実践を担っていた。即ち華北善隣会は、会社や団体の「善隣工作」部門に傘下団体の会員がいるという関係上、これらを間接的に統括する機関であったと言える。

二 『建設戦』の「善隣工作」をめぐる言説

『建設戦』は一九四二年八月に創刊された月刊誌で、第三一号まで現存が確認できる。第三〇号が一九四五年二月一日発行、次の第三十一号が同年七月二五日発行であり、この時期には大幅な遅れが生じている。

『建設戦』の発行形態やその変遷については既に菊地（二〇一九）も説明しているが、これに補足しつつ再度その変遷を辿っておく。まず発刊趣旨は、

華北に於ける国策会社等の警防機関員をして、建設戦の戦士たる矜持の下に、資源警防に鉄壁の陣を布かんが為、其の精神、技術、智識を錬磨向上し、特に皇道精神を涵養し、志気を昂揚し、華人掌握の要諦を把握し、業務遂行に方り極度の軍、憲依存心を排撃し、各機関相互の連携を緊密にし、各工作の有機的活躍を促進し、尚積極的、創意的、重点主義的、科学的なる任務の完遂に邁進せしむると共に、併せて会社等の首脳部以下に対し華北建設の為須要なる参考資料たらしむ。²⁴⁾

とある。即ち、当初は「資源警防」の「参考資料」として「国策会社等の警防機関員」を対象を限定した雑誌であった。『建設戦』第一号と第二号は奥付に「非売品（部外秘）」と書かれており、「本誌の内容に鑑み、その取扱いと保存には一段の注意を必要とする。読者諸君も充分この点を了解し、濫りに散佚せぬよう特に御配慮ありたい」とある。これが第三号になると編集後記に「本誌の取扱は、毎々申上ぐるように取扱に充分注意し、散佚せぬ様御注意を願ひ度い」とあり、一定の機密性を窺わせるものの、「本誌は各国策会社等に於ける個人購読者激増の傾向にあり、洵に喜ばしき次第であるが、各会社、組合、団体等に於ては適宜取纏め一括申込み頂き度い」とも書かれていることから分かるように、非売品ではなくなっている。第八号の編集後記からは、上記の機密性を窺わせ

る注意書きがなくなる。第一三号からは書店での販売も始め、²⁵⁾第一三号には「華北興亜翼賛会推薦誌として同会から大いに推称せらるるに至つた」とあり、²⁶⁾同号から第一八号まで表紙に「華北興亜翼賛会推薦誌」の文字が加わる。第二九号には、「日文明刊『建設戦』は、読者対象を主として重要産業機関に於ける日本青年層に置くと共に、併せて之が指導者層並一般在留邦人にも講読せしむる方針」²⁷⁾とあり、読者層を拡大していったことが窺える。

編者については奥付によると、第三号から編輯人が田邊益雄、発行人が隈元早苗、第一三三号から編輯人が古川貞一、発行人が橋本正純、第二七号から編輯兼発行人が内田哲雄になる。発行人の隈元と橋本は、北京日本大使館嘱託の肩書きで同誌に執筆もしている。²⁸⁾『建設戦』の発行業務が大使館で取り扱われていたことが改めて分かる。

『建設戦』が最も重点的に取り上げているテーマは、「善隣工作」と呼ばれる一種の宣撫工作である。第九号にある北京日本大使館総務部長から出された指示が、善隣工作について最も端的に説明している。

善隣工作とは会社団体等の周辺地区住民に対し物心両方面に亘り各種の恩恵を施し、其の福祉を増進し生活を向上し文化を進展し剿共思想の涵養を図り、彼等をして会社、団体等の恩恵を深く肝銘せしめ以て其の民心を確実に把握し、之をして其の積極的愛護者たらしめ民社不離一体を策し共存共栄を図ると共に大東亜共栄圏確立に重要な役割を演ぜしめんとするものなり。²⁹⁾

華北善隣会がまとめた実施要綱によると、善隣工作とは「利民工作、文化工作、思想工作、団体及組織工作、宣伝工作、警防工作、劳工動員工作」に分かれる。このうち「利民工作」の内容を簡単にまとめると、農業生産を支援して農民に経済的利益をもたらすことを中心に、教育、医療、福祉の充実などを含む。「警防工作」には戸籍調査、自衛団の強

化、情報網の整備や武力訓練などが挙げられている。³¹だが結局のところ、『建設戦』には「利民工作」こそが最も有効な「警防工作」だという認識が散見する。資源を中国共産党の襲撃から守るためには、資源を守る国策会社に周辺住民を協力させる必要がある。だが、教育水準の低い中国民衆には、いくら日本が進める戦争の正当性を宣伝したところで理解されない。それよりも、日本のおかげで中国人の生活と利益が守られていること、国策会社がなくなれば自分の生活も脅かされることを民衆に実感させる経済工作や福利工作の方が有効だ。このように考えたのである。³²経済工作を中心とする善隣工作に関する論説は、『建設戦』では最後まで一貫して見られるが、一方では善隣工作の定義の拡大も見られる。それが表れるのは第一号の巻頭言である。

善隣工作とは、日華両国善隣友好の誼を厚うし、之をして大東亜共栄圏の鞏固なる中核体たらしめ、以て万古不滅の新秩序を世界に樹立せんと希うものなるが故に、我が肇国の大精神を具顕し、皇道を四海に光被せんとする至高至聖の神業なり。乃ち本工作は在華邦人の悉くが皇道宣布の行者たる信念の下に其の進展に精進すべきものにして、決して単に国策会社の一部機関に於てのみ専任すべきものに非ず。³³

これに続いて第一三号から第一五号まで、巻頭言の前に「懸賞募集『善隣実話』』という案内が掲載される。そこでは「真の善隣工作を実践しつつある人達は、農村にも、部落にも巷にもいることはいるのであるが、これ等の人達は決して口に親善を唱えず、計画もしていない」と述べ、こうした「善隣工作」を実践している人を紹介する投稿を募るのだという。それは「例えそれが胡同の一出来ごとであっても結構」ともいう。³⁴即ち、「善隣工作」が国策会社の警防から日常生活における実践へと広がっているのである。

その「善隣実話」の入選作品及び選外佳作の一覧が、第一九号に掲載されている。挙げられている二十六作品中、作者の名前から判断するしかないが日本人の作品と思われるものは二作品しかない。³⁵応募資格には日本人か中国人かを問わないこととし、中国語で書いた作品も受け付けているが、応募状況の偏りの有無や選考の意図までは確認できない。それはともかくとして作品の内容に目を移すと、一等に入選した作品と選外佳作となった中国人の作品は、日本人と中国人の近所付き合いと助け合いや、北京の北海でスケートをしている時に氷が割れて湖に落ちた中国人を日本兵が助けようとしたエピソードを描いたものである。³⁶また、日本人の作品も掲載されているが、貧困にあえぐ中国人の幼い兄妹との出会いから始まり、近所の日本人の子供たちにその中国人兄妹と遊ぶようにさせたという体験談と、職場での日本人と中国人の融和を描いた体験談である。³⁷なお、二等に入選した中国人の作品だけは世界の情勢や歴史を俯瞰したもので、これらの中では例外的な内容である。³⁸

「善隣実話」以外に、第一四号には「中国人の良いところに就て」国策会社の役員、大使館の職員、ジャーナリストに尋ね、葉書で得た回答を掲載している。そこには中国人の忍耐力や協調性を高く評価する回答が多く見られる。³⁹また、第一七号に掲載されている北京市の東城第二国民学校校長の報告によると、日華善隣週間を迎えるにあたって、日本人児童に対して同期中に中国人に「善隣行為」をするよう事前に指導したという。そして児童が実践した「善隣行為」の内容がまとめられている。電車内で中国人に席を譲ったり中国人の荷物を持つのを手伝ったりしたこと、中国人の子供と仲良く遊んだこと、中国人の子供をいじめている日本人を止めたことなどが挙げられているが、期間中に中国人から親切にされた様々な経験についても、後日日本人児童に報告させている。⁴⁰第二六号には、子供たちの「善隣」の姿が見出せるという日本人児童の作

文を掲載し、日本人児童が中国人の怪我の手当てをした、荷物を運ぶの手伝った、中国人におもちゃやお菓子をあげたなど、中国人に親切にした行為と同時に、牛乳を売っている近所の中国人の家に遊びに行ったり牛乳をくれた、怪我の手当てをしてくれた、家の前の掃除を手伝ってくれたなど、中国人に親切にされた体験談も紹介されている。^⑤

このように『建設戦』では、日常生活において日本人と中国人が接する中で感情的融和を図ることが、「善隣工作」の延長線上に位置づけられるようになる。「建設戦」が中国人を見下す日本人の「誤れる優越感」や、中国人の反感を買う日本人の振る舞いを「反善隣工作」と呼んでたびたび批判しているのも、既に菊地（二〇一九）が論じている通りである。実態はともかくとして、日本人が中国人に対して好感を持つように仕向けつつ理解と融和を深めさせようとする編集姿勢が見えるのも、『建設戦』の特徴と言えよう。

更に、北京日本大使館が、長年中国人を対象とする社会事業に取り組んできた日本人を「日華親善の具現に功績ある優良邦人」、「広く中国人の尊敬信頼を受けている優良邦人」として表彰したことに伴い、『建設戦』は表彰を受けた人々を「日華善隣の殊勲甲ともいべき人人」と称え、その事績を詳細に報じている。^④『建設戦』がこうした「善隣」の模範的実践の宣伝にも重点を置いていたことも特徴として挙げておきたい。

三 『敦隣』に見る「中国人の立場」

『敦隣』は一九四四年一月に創刊された月刊誌で、一九四五年二月発行分まで現存が確認できる。『敦隣』の刊行については『建設戦』でも、本誌の姉妹誌月刊華文『敦隣』の創刊号が発刊されました、目下市中の中国書店で発売中であり、^⑥「薦御愛読を……」^⑤と呼びかけている。創刊

時より書店で販売していた雑誌であり、機密性はない。読者層について、『建設戦』には「華文月刊誌『敦隣』は中国有識青年層を一般対象とする」と説明されているが、^⑥『敦隣』が実施した座談会で読者対象は知識階級か一般人かと問われて、編者と思われる人物が「本誌は各階層の人々を対象にしたいと思っている」と答えていることから窺えるように、^⑦広く想定されている。そして『建設戦』は『敦隣』刊行について、中国語で「本会は敦仁善隣の思想を普及するという目的を達成するため、現在発行している日本語月刊雑誌『建設戦』以外に、中国語月刊総合雑誌『敦隣』を出版する予定である」という広報も載せている。誌面の内容はともかく、少なくとも両機関誌は共通の目的を持つものと位置づけられていたことは確かであろう。

奥付によると、編者は創刊号から一九四四年七月の第二巻第一期まで王真夫、第二巻第二期は「財団法人華北善隣会出版部」となっている。第二巻第三期の編集後記に、岳蓬の署名で「本刊主編王真夫氏は別の要職に就くため、本期より私が代わって編集を担当する」と書かれている。^⑧第二巻第四期の編集後記にも岳蓬の署名があるが、^⑨第二巻第五期以降は編集後記がないか、或いはあっても署名がないため、岳蓬が編者を継続していたかは断定できない。あとは第三巻第一期に「編者が事情により北京から半月離れたため、本号は金子兄に編集を代行していただいた」とある。^⑩なお、この王真夫と岳蓬は共に作家であり、華北作家協会会員として登録されている。^⑪

『敦隣』も華北善隣会編集部で編集しており、編集室の住所は『建設戦』と同じく華北善隣会の事務所であり、^⑫『建設戦』、『敦隣』双方の奥付に記載している発行元住所も一致している。即ち、編者は中国人だが、発行に向けての作業は『建設戦』と同じ空間でなされており、日本人の知らないところで中国人だけで編集発行作業を完結していたとは考えら

れない。編者の王真夫について、『新民報』は華北善隣会が「華人の善隣思想を更に強調するために『敦隣』の主筆として王真夫を迎えることにしたと報じている。王真夫はあくまでも華北善隣会の要請に依って編者を引き受けた立場にあると見て良からう。

だが『敦隣』には、中国人が編集するからにはその独自性を打ち出そうという姿勢が見えるのである。

まず、『敦隣』は発刊の辞から早速「中国国民の立場」を強調している。署名は目次に「編輯部」とあるだけだが、恐らく編者である王真夫が書いたものであろう。

我々の『敦隣』もいわゆる愛国憂国の士には売国団体の機関誌と見なされるかも知れないだろうか。しかし我々は敢えて正直に自己弁護の言葉を述べたい。「もし『善隣』が本当に売国なら、我々はすぐに『仇隣』の旗の下に立つ」と。理由は簡単だ。我々は中国の国民であり、中国の国民としての良心を持っているからだ。本誌の発刊の目的は「善隣」だが、この善隣とは外国に媚を売ることでは決してない。国を滅亡から救い、生き残りを図り、そして興亜の偉大な理想の上に構築するものだ。これは日華同盟条約にある「両国相互に善隣として其の自主独立を尊重しつつ緊密に協力して道義に基づく大東亜を建設し以て世界全般の平和に貢献せんことを期し之が障害たる一切の禍根を艾除する確乎不動の決意」をすることから出発するものと言えり。⁵⁵

そして、日中両国の善隣は足がかりにすぎず、最終的には人類の平和を目指すのだと言う。日中両国の戦争状態を嘆き、両国の親和問題を解決して大東亜戦争を完遂することを目的に創刊したと述べ、次のように続ける。

現段階では、民族間の数多の不公平は依然として徹底して解決さ

れておらず、我々の現実的な目的は中国自身の健全な発展と、中国国民の立場に立つて、中国国民の忠実な代表者となることに置く。これが本誌発刊にあたって考えていることだ。⁵⁶

張泉（一九九四、二〇〇五）は、この発刊の辞から、中国人の立場に立つという主張が際立っていることを認めているが、日華同盟条約を持ち出している時点で欺瞞に満ちたものだと見なし、他の教条的な掲載記事から見てもそれが分かると批判する。⁵⁷だが、編者のこうした主張が見られるのはこの発刊の辞だけではなく、単なる建前とは思えないほど繰り返されている。

創刊号の編集後記を書いたのも、目次にある署名が「編者」なので、王真夫であろう。「本号は翻訳作品が多く、中国人の立場に立つて、中国人の代弁者としてという、本誌の本来の趣旨から外れているように思える」と、やはり「中国人の立場」を強調している。⁵⁸そして寄稿者にも次のように要求するなど、日本に媚を売る態度に対する拒絶反応は際立っている。

寄稿者にもお願いしないといけない。卑怯な慣習に縛られないでいただきたい。心にもない、吐き気を催すような無闇な親日的言説は中日双方にとって無益だ。我々が望むのは、民族の情熱を輝かせ、中国国民の立場に立つて帝国の道を批判することであり、正しい善隣の理論と実践の道を知ることである。

編者は筆者と読者が一緒になって、本誌を今日の中国国民の読物に作り上げていくことを望んでいる。⁵⁹

第一巻第二期の編集後記は、読者の手紙を民族や国家の立場をもっと強く打ち出すようにとの激励の手紙と捉えてこれを喜びとし、読者の熱意に沿う編集に尽力すると述べるものである。⁶⁰

続けて第一巻第四、五期合刊の編集後記には、日本との関係に直接言

及していないが、中国の国家としての強化について論じた後で、恰も日本に対して対等関係を主張しているかのようには思わせる記述がある。

我々は中国の過去の排外思想に誤りがなかったと言うつもりはない。しかしいづれにせよ、「相手に対して自由平等に自分に接してくれるよう求めるなら、自分も自由平等に相手に接する」という基本的な国民の態度は保持せねばならない。善隣とはこの土台の上に構築すべきもので、この土台から離れて善隣が成立するはずがない。

我々は相手に不当な要求はしない。その代わりに、我々も相手も我々に不当な要求をすることを許してはならない。⁶⁴

第一巻第六期になると、編集後記に「私はこのような、人が歯牙にもかけないような下らない雑誌もできるだけ純潔に、誠実に、地味に仕上げようとしており、上質の栄養精神にはならなくても決して毒にはならないようにしている」と、少々積極性に陰りが見えながらも、「ただ我々の国家の健康のために、我々は可能な範囲で率直にものを言い、正直にことをなすだけだ」と、「中国人の立場」を示そうとはしている。あと、第二巻第一期の編集後記には特に「中国人の立場」に関わる記述はなく、第二巻第二期には編集後記自体がない。

このほか、王真夫は自身の民族意識の強さを披瀝する随筆も発表している。王真夫の略歴は張泉（二〇一七）がまとめているが、日本留学経験者である。国内で旧知の日本人と再会した際、「王君は日本人にそっくりになったね」などと言われたのが大変不愉快で、自分が頑なに守っている国家意識を刺激したという。更に、日本人からこのようなことを言われて嬉しがる中国人の友人を嫌悪し、やがては絶交したともいう。その後も自分の愛国心を再認識した体験に関する記述を繰り返す。⁶⁵

だが、こうした編者の姿勢と掲載記事の内容が釣り合っていないのである。

「中国人の立場」と言いながら、誌面は日本の文学作品や評論か、日中関係に直結させない世界情勢に関する時事論説が多くを占め、日中関係を論じるにしても、現状ではなく歴史を扱った論説が中心である。ここでは、その中で数少ない日中関係の時事論説について概観する。第二期のもの以外は、確実に王真夫が編者を務めていた時期の論説である。その内容はほぼ共通している。日本は近代以来一貫して中国を支援するために外国勢力と戦ってきた、今回の事変は英米勢力が引き起こしたもので、抗日戦争の道を選ぶのは間違っている、日本の真意はその後汪兆銘政権と平和の道を歩んできたことであらう。日本は大東亜戦争を通して東亜の各民族を解放するのだというものである。⁶⁶ 日本に対して中国を含む東亜の各民族を解放するののだというものである。日本に媚を売るという見方をしても良いのかも知れないが、素直に読めば日本に媚を売る言説だと受け取られても仕方がなからう。なお、日本以外の国の独立の重要性を説きつつも、大東亜共栄圏とは各民族国家が孤立した機械的な平等ではないと述べ、日本と中国の対等関係を必ずしも求めないかのような論説もある。⁶⁷

あと、この関係の言説として挙げられるのは、『新民報』の後続紙『華北新報』の、日中関係に関わる社説二点の転載である。これらは上記の論調とやや異なる。『敦隣』第二巻第一期に転載された社説は、日中提携の必要性を説くものである。中国人は日中全面戦争勃発後、かつての「懼日」から「媚日」に転換したが、いづれでも日本人との融和は不可能だという。そして日本人も中国に対する理解を欠く者がいることを批判し、双方の反省と対等関係の必要性を説く。日本人の「優越感」の存在にも言及しているが、これは日本当局の指導により日本人は既に改めたとしており、日本人を批判しているわけではない。⁶⁸ この点で抑制的な論調ではあるが、全体的に見て日本賛美の言説ではないことも確かである。⁶⁹

編者が岳蓬に代わった『敦隣』第二卷第三期に転載された社説は、日華同盟条約や大東亜共同宣言を持ち出して日中両国の独立自主の相互尊重や平等の関係を築くことの重要性を説く。それは日本との提携、「善隣」のあり方として論じたものであって、日本に對抗したり日本を批判したりする主張ではないが、対等の関係を求めることは即ち日本が中国を尊重すべきことを求めることであり、敢えて言えば「中国人の立場」を打ち出した言説という見方もできよう。この社説二点は、前述の複数論説に比べればその点は鮮明である。だが『敦隣』が他紙の社説の転載という方法を取り、自らの言葉で主張しないところに、「中国人の立場」を掲げていながら中途半端さが窺える。^⑧

見方を変えれば、『敦隣』が掲載した日中関係に関わる時事論説は以上に挙げた程度で、少数にとどまる。敢えてそれに直接関わらない分野の記事を多く掲載すること、即ち日本擁護の論説の濫発を抑制することが編者なりの「中国人の立場」の守り方だったという推測もできなくはない。張泉（一九九四、二〇〇五）は、前に挙げた王真夫の日本人との交流に関する随筆からその民族意識の強さが分かると述べた上で、文芸欄を充実させていたことを評価している。だが後述する座談会から窺えるように、論説で「中国人の立場」を主張できなかったことは、王真夫にとっても不本意だったようである。

また、『建設戦』との問題意識の差異も見て取れる。『建設戦』は経済工作を中心とする「善隣工作」について一貫して論じているが、これに関連する『敦隣』の記事は、『建設戦』に掲載されている三原敏男の善隣工作論の翻訳や、管翼賢が「親善の工作」として宣伝、慈善、教育などの工作を提案する論稿、農村の社会教育や中国人と日本人の混合教育を提唱する尹梅伯の論稿に限られる。また、『建設戦』のように日本人と中国人の日常における感情的融和を論ずることも殆どなく、『敦隣』の中で

敢えてこれに該当するものを挙げるならば「善隣実話」の中国語原文と、後述する商店をめぐる問題くらいである。だが『敦隣』が掲載している「善隣実話」は一等と二等の入選作品と、東京でのエピソードを描いた中国人の選外佳作一点に絞り込まれている。^⑨『建設戦』が取り上げた社会事業の功労者などは、親日化宣伝の格好の材料にもなりそうだが、これにも触れていない。『敦隣』は、『建設戦』が説くところの「善隣工作」を特に重視せず、『建設戦』に捉われない独自の編集姿勢をとっていたと見て良からう。

なお、王真夫の後任の編者である岳蓬は、『敦隣』で編者を引き継ぐにあたり、「編者は代わっても精神と態度は全く変わらない」と述べている。^⑩だが毎号巻末等に掲載している「月刊『敦隣』稿約」は、ちょうど編者が岳蓬に交代した第二卷第三期から、「本誌は敦仁善隣をもって、各民族国家の共存共栄と剿共思想を浸透させ、中日文化の交流を図り、新建設を促進することを目的とする」となり、前号までにはなかった「中日文化の交流を図り」という一言が加わっている。その意図は推測するしかないが、「中国人の立場」を主張する姿勢を抑えたように見えなくもない。

だが編者以外が直接「中国人の立場」を強調する言説は、これ以降の第二卷第五期になって漸く現れる。同号に掲載された『敦隣』批評座談会「は、中国人のみが集まる座談会で、既に編者の役割を退いた王真夫も「本刊」所属として出席している。ここで王真夫は、冒頭で参加者に対して「中国人の立場で遠慮なく批判して下さい」と述べる。^⑪そして文芸記事を増やすべきだという意見に対して、王真夫は「本善隣会と『敦隣』月刊の趣旨からすれば、中国人の立場に立って真実を語るよう、文芸を重視するよりも論文に力を入れた方が良い」と答えている。他に出席者の一人である顧共鳴が、『敦隣』の論文は『建設戦』よりも良い。

なぜなら真に中国人の立場でものを言っているところがあるからで、完全に媚日というわけではない。敦隣とは媚日にとどまらないことで初めて達成できるものなのだ」と発言しているが、それ以外に参加者から「中国人の立場」を打ち出した発言は見られない。^⑦

次に、第三巻第一期には、日本人の商店が中国人に物を売らないという問題を取り上げ、「賢明な日本人店主よ！ あなたたちも反省しないとイケない。今日の中国で、あなたたちのこんなおかしな経営が中国人の反感を引き起こすのだ」と訴える記事や、^⑧日華同盟条約や大東亜共同宣言で中国の独立自主の尊重を表明したからには、「日本は政治独立の原則によって、中国の政治独立を実現させ、中国の内政に干渉せず（以下伏字）とすべきだ」と述べた上で、「日本は中国を占領地と見てはいけない。中国人に対して戦勝者気取りではいけない。中国人も日本人を仇敵と見なしてはいけない。こうして互いに尊重し合ってこそ親善は実現するのだ」と主張する記事が見られる。^⑨『敦隣』が掲載している、日本に媚を売らない「中国人の立場」を意識した言説は、これくらいである。このように、同誌上で编者以外から「中国人の立場」を打ち出した言説はあまりにも少なく、そうした言説が見られるようになるのも、創刊から相当な時間が経過してからなのである。

その原因は、前述の創刊号の編集後記から窺えるように、「中国人の立場」に立つと意気込む编者に同調する論者がいなかったのか、或いは言論に何らかの圧力や自主規制が加えられていたのかなどは、確定できない。だが、日本人と中国人が共存する公的機関で、日本に媚を売らずに「中国人の立場」に立つと取って強調する雑誌を刊行できたこと自体と、それでありながら他の論者によって同調する言論が展開されない中途半端さは、日本占領地区における日本人と中国人の共存のあり方、言論環境のあり方の一端を浮かび上がらせる事例として注目すべきであろう。

おわりに

本稿は、華北善隣会という組織とその機関誌を取り上げ、殆ど知られていない組織であるためにその基本的な事実確認をしながら、日本占領地区における、加えて対華新政策以降の、日本人と中国人が共存する公的機関における両者のあり方を考察した。

在留邦人を対象とする『建設戦』が経済工作を中心としつつ、日常における中国人との感情的融和も含む「善隣工作」を重点的に論ずるのに対して、同一組織の機関誌でありながら、『敦隣』はこの「善隣工作」を中国人に宣伝するのでもなく、日常における日本人との感情的融和を説くだけでもなく、日華同盟条約を持ち出しつつ「中国人の立場」を掲げて刊行された。このように、両誌を併せて見ると中国人が日本人と一定の距離を置いて「中国人の立場」を主張しながら共存していた状況が窺えるものの、結局『敦隣』にはこの「中国人の立場」に同調する言説は殆ど見られず、掛け声だけに終わった感が否めない。完全に言論が統制されているわけではないが、「中国人の立場」をこぞって主張するわけでもない。このような中途半端さが、当時の日本占領地区における実態の一端なのかも知れない。

本稿で考察したことは、あくまでもひとつの事例に過ぎない。日本占領地区における日本人と中国人の共存のあり方やその言論環境については、いずれも更に多くの組織や資料の事例研究を積み重ねることで、また新たな面が見えてこよう。

注

① 近年の傀儡政権史研究をめぐる動向については、石島（二〇一五）など

が参考になる。

- ② 張泉『抗戦時期的華北文学』、貴州教育出版社、二〇〇五年、二四、四九八頁。
- ③ 同右、一二二―一二三頁、張泉『淪陥時期北京文学八年』、中国和平出版社、一九九四年、九五―九六頁。『敦隣』の文芸欄に関しては前掲張泉、二〇〇五、二五七―一五八頁も参照。
- ④ 前掲張泉、二〇〇五、一二二頁。
- ⑤ 張泉『殖民拓疆与文学離散』、北方文艺出版社、二〇一七年、三一―三二〇頁。
- ⑥ 曹汝霖には回想録『一生之回憶』があるが、そこに華北善隣会に関する記述は見られない。
- ⑦ 東亜新報天津支社編『華北建設年史』、一九四四年、社文四七頁、「財団法人華北善隣会」『建設戦』第二七号、一九四四年一月一日、七六頁、「財団法人華北善隣会の概要」『建設戦』第二九号、一九四五年一月一日、八四―八五頁。
- ⑧ 「財団法人華北善隣会の概要」『建設戦』第二九号、一九四五年一月一日、八五頁。
- ⑨ 「華北興亜翼賛会本部創設さる」『建設戦』第一三三号、一九四三年八月一五日、六一―六七頁。
- ⑩ 「財団法人華北善隣会の概要」『建設戦』第二九号、一九四五年一月一日、八八頁。
- ⑪ 「華北善隣会の目標」『建設戦』第一三三号、一九四三年八月一五日、頁数なし。第一七号まで同じものを掲載。
- ⑫ 菊地俊介「日本占領下華北の在留邦人雑誌に見る「日華親善」の矛盾」『社会システム研究』第三八号、二〇一九年三月、九三頁。
- ⑬ 「善隣週間昨日開始 促進中日両国邦交敦睦」『新民報』(北京)、一九四三年一月一六日、三頁、「互諒互助共敬共愛 保持中日永久友善 高伯亮昨播講善隣週間意義」『新民報』(北京)、一九四三年一月十六日、四頁。
- ⑭ 北京大日本帝国大使館「日華善隣週間実施さる」『建設戦』第一五号、一九四三年一月一日、六一―六七頁。
- ⑮ 華北興亜翼賛会本部「本会と新民会の渾然一体化」『建設戦』第一八号、一九四四年二月一日、四八―四九頁。
- ⑯ 「民衆熱烈参加善隣行事 奠定東亜永久和平基礎」『新民報』(北京)、一九四三年一月一九日、三頁。
- ⑰ 「財団法人華北善隣会の概要」『建設戦』第二九号、一九四五年一月一日、八五―八六頁。
- ⑱ 前掲『華北建設年史』、一九四四年、社文四七頁、「華北善隣会嘉惠京市貧黎 主辦大学生冬賑演劇会」『華北新報』、一九四五年一月七日、四頁、「大学生冬賑演劇大会開催」『建設戦』第二九号、一九四五年一月一日、四二頁、「財団法人華北善隣会の概要」、同、八六頁。
- ⑲ 和田武夫「華北善隣同志会の発足と其の方向」『建設戦』第一四号、一九四三年一月一日、六八頁。
- ⑳ 「財団法人華北善隣会の概要」『建設戦』第二九号、一九四五年一月一日、八五頁。
- ㉑ 同右、八七頁。
- ㉒ 「建設戦月報」『建設戦』第一二二号、一九四三年七月一五日、六七頁。
- ㉓ 在北京大日本帝国大使館総務部長「相寄る魂 国民と国民の結盟が必要」(日華善隣週間実績講評)『建設戦』第一七号、一九四四年一月一日、一二頁。
- ㉔ 前掲菊地、二〇一九、八一頁。
- ㉕ 「発刊趣旨」『建設戦』第一号、一九四二年八月一五日、頁数なし。
- ㉖ 「編輯室より」『建設戦』第一四号、一九四三年一月一日、七二頁。
- ㉗ 「編輯室より」『建設戦』第一三三号、一九四三年八月一五日、七二頁。
- ㉘ 「財団法人華北善隣会の概要」『建設戦』第二九号、一九四五年一月一日、八七頁。
- ㉙ 隈元早苗「「スパイ」に就て」『建設戦』第七号、一九四三年二月一五日、一八頁、橋本正純「皇国民の錬成に就て」『建設戦』第九号、一九四三年四月一五日、二七頁。
- ㉚ 「北京大使館総務部長より指示せられたる資源警防及善隣工作」『建設戦』第九号、一九四三年四月一五日、二四頁。
- ㉛ 華北善隣会「善隣工作に就て」『建設戦』第九号、一九四三年四月一五日、三〇―三二頁。

- ③② 三原敏男「善隣工作は神業なり」『建設戦』第二号、一九四二年八月五日、一五—一六頁、華北善隣会「善隣工作に就て」『建設戦』第九号、一九四三年四月十五日、三〇頁、三原敏男「警防並善隣工作について」『建設戦』第一〇号、一九四三年五月十五日、三五—三六頁、鈴木美通「日華の善隣友好に就て」『建設戦』第一六号、一九四三年二月一日、九—一〇頁など。
- ③③ 三原生「巻頭言 反善隣工作を粉碎せよ」『建設戦』第一号、一九四三年六月十五日、二頁。現物の署名は「(三原生)」となっているが、三原敏男のことと思われる。
- ③④ 「懸賞募集『善隣実話』」『建設戦』第一三三号、一九四三年八月十五日、頁数なし。第一五号まで同じものを掲載。
- ③⑤ 「懸賞文当選発表 選外佳作」『建設戦』第一九号、一九四四年三月一日、五四頁。
- ③⑥ 第一三三号から第一五号までの「懸賞募集『善隣実話』」募集案内より。なお、『建設戦』に掲載された中国人の作品は全て日本語に翻訳されている。
- ③⑦ 呉錚著、六峯訳「無言の隣人」『建設戦』第一九号、一九四四年三月一日、八三—八七頁、袁之作、泡影訳「田口太太」『建設戦』第二七号、一九四四年一月一日、七八—八〇頁。目次には作者は「袁之」とあるが、本文の署名は「袁」の字が消えている。楊劍青作、真庭訳「二人の日本人」『建設戦』第三〇号、一九四五年二月一日、六五—六六頁。これは中国人の東京滞在中のエピソードである。
- ③⑧ 雨英作、甲山訳「北海」『建設戦』第二二二号、一九四四年六月一日、七四—七五頁。
- ③⑨ 白石正行「日華子供橋」『建設戦』第一八号、一九四四年二月一日、七〇—七二頁、小西信行「匪襲を避けて出勤」『建設戦』第二二二号、一九四四年五月一日、三九—四〇頁。白石の作品タイトルの前には他の中国人の作品のように「善隣実話」ではなく、「善隣体験記」と書かれているが、「懸賞文当選発表 選外佳作」『建設戦』第一九号、一九四四年三月一日、五四頁に「善隣実話」と並んで同作品が挙げられている。また「善隣懸賞徴文 正選為呉錚作品」『新民報』(北京、一九四三年二月二十五日、三頁で
- は「善隣実話即善隣体験記」というように、同一に扱っている。
- ④⑩ 衛潔氏「日華善隣論」『建設戦』第二〇号、一九四四年四月一日、三五—五〇頁。衛潔氏「善隣記」『敦隣』第一卷第一期、一九四四年一月一日、六四頁と「善隣懸賞徴文 正選為呉錚作品」『新民報』(北京、一九四三年二月二十五日、三頁の表記は衛潔氏。
- ④⑪ 「一、中国人の良いところに就て 二、善隣工作の具体的方法に就て」『建設戦』第一四号、一九四三年一月一日、二〇—二二頁。
- ④⑫ 森英雄「善隣の日、子供等は何を与え、何を受けたか」『建設戦』第一七号、一九四四年一月一日、二四—二五頁。
- ④⑬ 森英雄「子供に見たる善隣のすがた」『建設戦』第二六号、一九四四年一月一日、六一—六五頁。
- ④⑭ 「日華善隣の先駆 誉れの表彰を受けた人々」『建設戦』第二〇号、一九四四年四月一日、二二—二四頁。
- ④⑮ 「編輯室より」『建設戦』第一八号、一九四四年二月一日、七八頁。
- ④⑯ 「財団法人華北善隣会の概要」『建設戦』第二九号、一九四五年一月一日、八七頁。
- ④⑰ 「敦隣」批評座談会「敦隣」第二卷第五期、一九四四年一月一日、五四頁。
- ④⑱ 「中文月刊総合雑誌「敦隣」」『建設戦』第一六号、一九四三年二月一日、頁数なし。
- ④⑲ 岳蓬「編後記」『敦隣』第二卷第三期、一九四四年九月一日、七二頁。
- ④⑳ 岳蓬「編後記」『敦隣』第二卷第四期、一九四四年一月一日、二四頁。
- ⑤⑰ 「編後記」『敦隣』第三卷第一期、一九四五年一月一日、四八頁。
- ⑤⑱ 「華北作家協会会員録」『華北作家月報』第三期、一九四二年二月一日、一五頁、「華北作家協会三十二年度春季定期全体大会」『華北作家月報』第六期、一九四三年六月二〇日、五六頁。王真夫の略歴は前掲張泉、二〇—一七、三二—三三頁参照。岳蓬について説明している先行研究は見当たらないが、文学の不振は政治と無関係ではなく、縛りがひどく言いたいことが言えないという座談会での岳蓬の発言が、日本占領下華北の文学が日本の国策に迎合する中、沈黙を余儀なくされた作家たちの姿を叙述する先行研究で引用されている。封世輝「導言」、錢理群主編『中国

淪陷区文学大系 評論卷」、広西教育出版社、一九四八年、導言二頁、「東亜聯盟文芸座談会」『東亜聯盟』第二卷第六期、一九四一年二月一〇日、三一頁。なお、『敦隣』及び同時代の他誌を見ても、『岳蓬』の署名で掲載されている記事が殆どだが、『傳岳蓬』という表記も見える。『敦隣』第二卷第五期掲載の「『敦隣』批評座談会」と、『東亜聯盟』第七卷第一期の最終ページにある『文筆』という雑誌の広告に「訳稿執筆者」の一人として書かれているのがその事例である。前者の座談会では、「本刊」側の出席者として傳岳蓬の名前が書かれており、また編者の立場としての発言が見られることから、傳岳蓬と岳蓬は同一人物ではないかと思われる。「敦隣」批評座談会「『敦隣』第二卷第五期、一九四四年一月一日、五三―五五頁。

⑤3 「月刊『敦隣』稿約」「建設戦」第一六号、一九四三年二月一日、頁数なし。『建設戦』は月号奥付に発行元の住所を記載している。

⑤4 「善隣会免費治療部 昨酷寒中就診者極踴躍」『新民報』(北京)、一九四三年一月一八日、第二頁。

⑤5 編輯部「創刊辞」『敦隣』第一卷第一期、一九四四年一月一日、六一―七頁。日華同盟条約の日本語訳は東洋経済新報社編『日本経済年報』第五五輯、一九四四年三月、一三七―一三八頁に依った。

⑤6 編輯部「創刊辞」『敦隣』第一卷第一期、一九四四年一月一日、七頁。

⑤7 前掲張泉、二〇〇五、一二二―一二三頁、前掲張泉、一九九四、九五―九六頁。

⑤8 編者「編後随想」『敦隣』第一卷第一期、一九四四年一月一日、頁数なし。

⑤9 同右。

⑥0 編者「編後随想」『敦隣』第一卷第二期、一九四四年二月一日、七二頁。

⑥1 「編後随想」『敦隣』第一卷第四、五期合刊、一九四四年五月一日、七一頁。

⑥2 「編後随想」『敦隣』第一卷第六期、一九四四年六月一日、七二頁。

⑥3 前掲張泉、二〇一七、三二―三九頁。

⑥4 真夫「旅日随想」『敦隣』第一卷第一期、一九四四年一月一日、五八―五九頁。「真夫」は王真夫の筆名。「華北作家協会会員録」『華北作家月報』

第三期、一九四二年二月一五日、一五頁。なお、同内容の随筆が中国語雑誌『中国文学』(第一卷第一期、一九四四年一月、六五―六六頁)にも掲載されており、王真夫の個人的な民族意識の発露自体が『敦隣』の特徴とは言えない。

⑥5 高伯亮「善隣須在不言中実行」『敦隣』第一卷第一期、一九四四年一月一日、八一―九頁、李季徐「東亜共栄偉業逐漸完成」『敦隣』第一卷第二期、一九四四年二月一日、六一―九頁。これに加えて桑野の論説は、中国の復興も含めて皆日本の協力の結果だと日本を持ち上げる。桑野「保全中国的中日親善」『敦隣』第二卷第二期、一九四四年八月一日、四―八頁。

⑥6 桑野「東亜民族親善与民族国家樹立」『敦隣』第一卷第六期、一九四四年六月一日、一一―一二頁。

⑥7 この時期にも日本人の「優越感」が中国人から批判されていたことは、前掲菊地、二〇一九、九一―九二頁を参照。

⑥8 「対中日親善問題大胆の幾句話」『敦隣』第二卷第一期、一九四四年七月一日、一三一―一四頁、「社論 対中日親善問題大胆の幾句話」『華北新報』、一九四四年五月二八日、一頁。

⑥9 「由善隣做到中国独立自主」『敦隣』第二卷第三期、一九四四年九月一日、第三三―三四頁、「社論 由善隣做到中国独立自主」『華北新報』、一九四四年七月七日、一頁。

⑦0 三原敏男「神聖的善隣工作」『敦隣』第一卷第三期、一九四四年三月一日、二九―三三頁、同『敦隣』第一卷第四、五期合刊、一九四四年五月一日、二八―三一頁、同『敦隣』第一卷第六期、一九四四年六月一日、二四―二七頁、同『敦隣』第二卷第一期、一九四四年七月一日、三七―四三頁。

⑦1 管翼賢「昂揚中日善隣真義」『敦隣』第一卷第六期、一九四四年六月一日、六頁。

⑦2 尹梅伯「究竟做到了幾分期待着善隣工作的朋友們」『敦隣』第二卷第五期、一九四四年十一月一日、一六頁。

⑦3 吳錚「無言的隣人」『敦隣』第一卷第一期、一九四四年一月一日、六一―六三頁、衛潔民「善隣記」『敦隣』第一卷第一期、一九四四年一月一日、六四―七二頁、楊劍青「兩位日本人」『敦隣』第二卷第四期、一九四四年

一〇月一日、五七頁。

⑦④ 岳蓬「編後記」『敦隣』第二卷第三期、一九四四年九月一日、七二頁。

⑦⑤ 「『敦隣』批評座談会」『敦隣』第二卷第五期、一九四四年二月一日、五三頁。

⑦⑥ 同右、五四頁。

⑦⑦ 同右。

⑦⑧ 愛隣「大百貨店与不売給支那人」『敦隣』第三卷第一期、一九四五年一月一日、九頁。

⑦⑨ 樊季「中日親善之管見」『敦隣』第三卷第一期、一九四五年一月一日、一八頁。

参考文献

日本語

論文・研究書・回想録

石島紀之「対日「協力」の諸相」『現代中国研究』第三五、三六合併号、二〇一五年一月

菊地俊介「日本占領下華北における在留邦人の対中国認識」『OUGCブックレット 日中台共同研究「現代中国と東アジアの新環境」② 二十一世紀の日中関係—青年研究者の思索と対話—』、二〇一四年三月

菊地俊介「日本占領下華北の在留邦人雑誌に見る「日華親善」の矛盾」『社会システム研究』第三八号、二〇一九年三月

嵯峨隆『アジア主義と近代日中の思想的交錯』、慶応義塾大学出版会、二〇一六年

杉野要吉編『交争する中国文学と日本文学』、三才社、二〇〇〇年

曹汝霖回想録刊行会編訳、『一生之回憶』、鹿島出版会、一九六七年

堀井弘一郎「親日」派華字紙『中華日報』の日本批判、堀井弘一郎、木田隆文編『戦時上海グレーゾーン』（『アジア遊学』第二〇五号）、勉誠出版、二〇一七年

同時代資料

華北善隣会『建設戦』第一号〜第三一号、一九四二年八月〜一九四五年七月

東亜新報天津支社編『華北建設年史』、一九四四年

東洋経済新報社編『日本経済年報』第五五輯、一九四四年三月

中国語

論文・研究書・回想録

徐邁翔、黄万華『中国抗戰時期淪陷区文学史』、福建教育出版社、一九九五年

錢理群主編『中国淪陷区文学大系 評論卷』、広西教育出版社、一九九八年

曹汝霖『一生之回憶』、春秋雜誌社、一九六七年

張泉『淪陷時期北京文学八年』、中国和平出版社、一九九四年

張泉『抗戰時期的華北文学』、貴州教育出版社、二〇〇五年

馮吳『民族意識与淪陷区文学』、北方文艺出版社、二〇一七年

馮吳『民族意識与淪陷区文学』、中国社会科学出版社、二〇一七年

同時代資料

華北作家協會『華北作家月報』第一期〜第八期、一九四二年九月〜一九四三年八月（最終号の出版年月については現物に記載がないため、現物に出版年月の記載がある他の号からの推定）

華北作家協會『中国文学』第一卷第一期〜第一卷第一期、一九四四年一月〜一九四四年一月（右に同じく推定）

華北新報社『華北新報』一九四四年五月一日〜一九四五年九月三〇日

華北善隣会『敦隣』第一卷第一期〜第三卷第二、三期合刊、一九四四年一月〜一九四五年二月

新民報社『新民報』（北京）一九三八年一月一日〜一九四四年四月三〇日

中国東亜聯盟協會『東亜聯盟』第一卷第一期〜第八卷第五、六期合刊、一九四〇年六月〜一九四五年一月

（本稿は南開大学歴史学院博士後研究人員（二〇一七年九月から二〇一九年二月まで）在職中の研究成果である）

（本学BKC社系研究機構客員研究員）